

# 社会技術研究開発事業 令和4年度研究開発実施報告書

科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への  
包括的実践研究開発プログラム

「パンデミックの ELSI アーカイブ化による感染症にレジ  
リエントな社会構築」

研究代表者

児玉 聡

京都大学大学院 文学研究科 教授

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 実施内容・結果	3
2 - 3. 会議等の活動	8
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	9
4. 研究開発実施体制	10
5. 研究開発実施者	11
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	12
6 - 1. シンポジウム等	12
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	13
6 - 3. 論文発表	14
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	14
6 - 5. 新聞／TV 報道・投稿、受賞等	15
6 - 6. 知財出願（出願件数のみ公開）	16

## 1. 研究開発プロジェクト名

「パンデミックの ELSI アーカイブ化による感染症にレジリエントな社会構築」

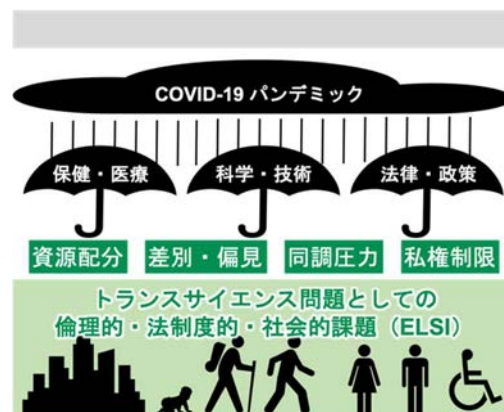
## 2. 研究開発実施の具体的内容

### 2 - 1. プロジェクトの達成目標

今般の COVID-19 のパンデミック(世界的大流行)は、日本を含めた世界中の国々で公衆衛生的危機(public health emergency)をもたらした。感染症のパンデミックは、感染拡大による重症者や死亡者を生み出すだけでなく、パンデミックを阻止または収束させようとする保健・医療、科学・技術、および法・政策の対応が、医療資源配分の問題や差別・偏見の問題、また人権やプライバシーの制限の問題など、さまざまな倫理的・法制度的・社会的課題(以下、ELSI)をもたらす可能性がある。すなわち、パンデミック収束に向けた取り組みは、社会科学も含めた広義のサイエンスの問題であるが、その取り組みによって生じる ELSI は、優れてトランスサイエンスの問題だと言える(右図)。今後発生しうる感染症にレジリエントな社会を構築するには、これらの ELSI を予め想定して取り組むことが不可欠である。

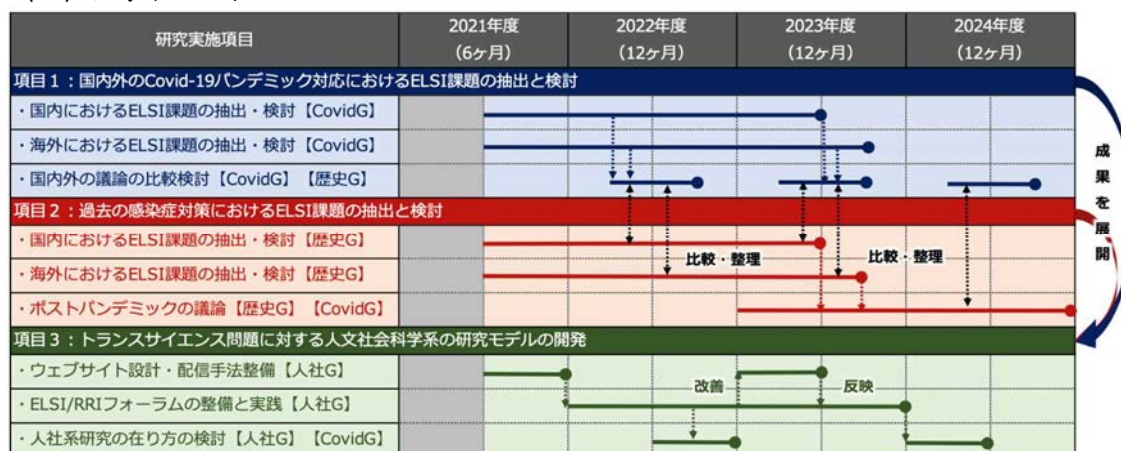
このような ELSI について一例を挙げると、感染症対策の一つにワクチンがあるが、その開発から実際の接種までの間には、臨床研究における研究倫理の問題(誰が研究参加者になるか、早期承認は認められるか、ヒューマンチャレンジ研究は正当化できるか等)、各国及び国内でどのように分配するか、また市民の間でのワクチン接種の優先順位やワクチンの特許問題をどうするか、といった多くの ELSI が生じうる。これらの課題について、日本および世界の主だった国々がどのように取り組んだのかをアーカイブしておくことは、次のパンデミック発生時に必ず役立つと考えられる。

そこで、本プロジェクトの目標は、現今のパンデミックを収束させるために日本及び他国で行われてきた保健・医療、科学・技術、及び法・政策上の対応が生み出した ELSI 並びに課題解決への取り組みを整理しアーカイブすることを通じて、感染症対策に伴って生じる諸問題とその解決策について一覧性の高い基礎資料を作成することにより、将来のパンデミック発生時により倫理的な政策立案を可能とすることである。そして、この試みを通じて、トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系研究モデルの開発を行い、あるべき ELSI 研究の姿や社会実装の方法論を構築する。



## 2 - 2. 実施内容・結果

### (1) スケジュール



### (2) 各実施内容

#### ■項目 1：国内外の COVID-19 パンデミック対応における ELSI の抽出と検討

実施内容：2022 年度は、(1) 日本国内の ELSI 課題に関して、新聞・雑誌記事データベース、学術文献データベース、内閣府を始めとする公的機関のウェブサイト等を用いて、重要な問題の抽出や論点整理等の作業を行った。また、(2) 海外諸国に関しても、新聞・雑誌記事データベース、学術文献データベース、政府、公的機関、大学、シンクタンク等の信頼できるウェブサイトを用いて、パンデミック対応における ELSI に着目し情報を整理しアーカイブ化を行った。また、海外の研究者とのワークショップや意見交換なども積極的に行い、パンデミック対応に関する世界的な課題を析出することに努めた。

#### ■項目 2：過去の感染症対策における ELSI の抽出と検討

実施内容：2022 年度は、新型インフルエンザ、エイズ、SARS、MERS、ハンセン病、スペイン風邪、ポリオ、天然痘、コレラなど、過去の感染症対策に関する文献調査を新聞・雑誌記事データベースおよび学術文献データベース等を用いて行い、主要な ELSI とそれへの対応についてアーカイブ化する作業に取り組んだ。特に、2022 年度は、日本の感染症法の成立前後の厚生科学審議会の議事録の整理を進めた。

#### ■項目 3：トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系の研究モデルの開発

実施内容：2022 年度は、トランスサイエンス問題に対して人文社会科学系の研究はどのような貢献を果たしうるかという問題意識に基づき、研究成果のウェブサイトでの公開、ソーシャルメディアの発信、メディア関係者らとの協同に基づくブログ記事作成を行うなどした。また、ELSI/RRI に造詣の深い研究者、URA 等からなる ELSI/RRI フォーラムを構築し、本プロジェクトおよび人社系の ELSI 研究のあるべき姿について定期的に意見交換した。この ELSI/RRI フォーラムは、2022 年度は 3 回ほど開催され、その記録は読売新聞社の増田弘治氏らによる協力のもと、一般にわかりやすい形で編集し、web 上で公開されている。

以上の各項目における成果は、児玉・三上・伊沢での週例でのミーティング及び研究者全体での月例ミーティング等で全体にフィードバックし議論を重ねることで、決して各研究が孤立することのないように、注意を払った。

### （3）成果

#### ■項目1：国内外の COVID-19 パンデミック対応における ELSI の抽出と検討

##### <資料紹介>

- ・オックスフォード大学「COVID-19 政府対応トラッカー」概要報告

URL: <https://onl.sc/Z31S9qA> <https://onl.sc/Z31S9qA>

得られた知見：これは、OECD 加盟 18 か国の 67 評価の分析から得られた 14 の知見を提示した資料であるが、各国のパンデミック準備態勢が不十分であること、中央・地方政府間の障壁、明確で一貫したコミュニケーション戦略の必要性、社会的弱者を対象とした経済措置の困難さ等が指摘されており、日本の政策評価は含まれていないものの、今後の日本の政策対応の在り方を検討する際に必要な指針を与えるものと考えられる。

- ・アイゼンバッハ、2020, “How to Fight an Infodemic: The Four Pillars of Infodemic Management”概要紹介

URL: <https://onl.sc/naVqxHu> <https://onl.sc/naVqxHu>

得られた知見：これは、カナダの健康情報学の専門家アイゼンバッハが、インフォデミック（誤情報の拡散）と戦うための方法（インフォデミオロジー）を紹介し、この方法を 4 本の柱としてまとめた論文。4 本の柱とは 1. 正確な知識の翻訳、2. 知識のフィルタリング、3. eヘルスリテラシーの構築、4. インフォベイランスのことであるが、情報科学、心理学、科学社会学など、多岐にわたる学際的な協働が必要とされている点が重要である。

- ・陰謀論に対処する教師のためのガイドライン『Conspiracy Theories in the Classroom』概要紹介

URL: <https://onl.sc/qSyRBjS> <https://onl.sc/qSyRBjS>

得られた知見：これは、UCL 教育研究所講師のジェレミー・ヘイワードとジェマ・グロンランドによって作成された、教室で実際に陰謀論に対処する教師のためのガイドラインである。特に、3 章、4 章では、陰謀論が持ち出された際の指導要領や、教室で取り組むべき具体的な教育アプローチと利用可能な教材が提示されている点は注目に値する。さらに、生徒が教室で陰謀論を持ち出した際には、①陰謀論に対する強い否定や言い争いを避けながら、②その生徒が陰謀論をどれだけ深く信じているのかを、時には教室外でのくだけた会話も交えながら見定めて、③両者の共通の基盤を見つけ批判的思考を陰謀論そのものに向けさせるようその生徒に促す、という大まかな流れが提示されているという点で、教師にとってきわめて実践的であり、現場からのフィードバックを基により一層洗練させる価値のあるものと思われる。

- ・中国のコロナ対策「乙類乙管通知」の紹介

URL: <https://onl.sc/QjaJw6s> <https://onl.sc/QjaJw6s>

得られた知見：中国のコロナ対策においては、長期的かつ恒常的な取り組みが必要であるとする認識がある。また、検査要件や行動制限の緩和が図られる一方、責任意識の強化、予防接種の重視といった、個人の取り組みが強調されている。さらに、医療機関それぞれの役割、相互の連携を強調している点も重要であり、患者の増加・医療体制の逼迫に向けた対応を改めて求めている。経済活動と感染症の対策との両立に関する不安も見てとれる。

##### <翻訳・抄訳>

- ・OECD「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対応の政府評価から得られる最初の教訓：知見の統合」

URL: <https://onl.sc/NYA2m5H> <https://onl.sc/NYA2m5H>

得られた知見：この報告書は、パンデミック発生の初期の間に、OECD の各国が自ら行った新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対応についての 67 の評価書・報告書

を、統合して分析したものである。ここでは、パンデミックに対する一般的な準備、とりわけ、世界的健康危機に関連する主要な人的コストと財務コストという観点ที่ไม่十分であったことや、パンデミック対応に伴う長期的な財政負担を慎重に監視しなければならないこと、さらに、市民からの信頼を得るためのクライシス・コミュニケーション及び透明性が必要である、といったことが提言されている。しかし、各々の政策の比例性や一貫性といったことについては検討されておらず、今後の調査の対象とすべきと思われる。

- ・ WHO「WHO コンピテンシーフレームワーク：インフォデミックマネジメントに対応できる人材の育成」（全訳）

URL: <https://onl.sc/youHiGAG> <https://onl.sc/youHiGAG>

得られた知見：本報告書は、保健機関の従業者の能力の強化、教育、および訓練を導くための一連の能力（コンピテンシー）を概説することにより、インフォデミックをマネジメントするための国家レベルでの取り組みを強化することを提言している。インフォデミックへの対策が個人的なレベルの指摘にとどまりがちな日本において、この枠組みは重要な役割を果たしうると評価される。

- ・ NAS「CSC(危機医療水準)の新しい展開と COVID-19 の教訓」（抄訳）

URL: <https://onl.sc/pT3sz21> <https://onl.sc/pT3sz21>

得られた知見：本報告書は、米国で 2005 年に策定が開始された CSC(Crisis Standard of Care, 危機医療水準)が、新型コロナウイルス発生以来、どのように改変され、医療現場の課題にどの程度対応することができたのかという点について、専門家や医療関係者の視点から振り返り、コロナ禍を通じて得た様々な教訓を将来の公衆衛生上の緊急事態の際に活かせるように、CSC および米国の医療体制の改善に向けての提言をするものである。具体的には、人員配置の問題への対処や医療従事者のメンタルケア、トリアージ、テクノロジーの利用可能性等が論点として挙げられ、また、人種や障害などといったことがらに関わらず、公正なケアが提供できるように、意思決定の過程に各地のコミュニティが参与できる体制を作り上げ、かつ、CSC の倫理的側面を見直す必要が指摘されている。パンデミック下という危機的状態においても、公正かつ効果的な医療を提供するための指針として、日本国内においても大きな重要性をもつ。

#### <ワークショップ・シンポジウム>

- ・ 2022 年 11 月 19 日：日本生命倫理学会 公募シンポジウム「パンデミック ELSI の諸相」
  - ・ 2022 年 12 月 5 日：韓国・延世大学 Ilhak Lee 准教授らとのオンライン・シンポジウム, “Pandemic responses in Korea and Japan”
  - ・ 2022 年 12 月 25 日：2022 年度京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム「人文・社会科学と倫理的・法的・社会的課題(ELSI)研究」
  - ・ 2023 年 3 月 7 日：台湾・国立台湾大学 Daniel Tsai 教授らとのオンライン・シンポジウム”Taiwan-Japan bioethics symposium on digital tracing in pandemic”
- 得られた知見：各国におけるパンデミック対応を比較検討するワークショップを行った結果、以下のような点が国際的に問題になっていることが確認された。①医療資源の配分の議論の不足、②差別や偏見の防止策、③国際協調、④科学的助言の適切なガバナンス、⑤リスク・コミュニケーション、⑥SNS 上の誤報へ対応する取り組み、⑦司法・行政・立法の連携による人権保障、⑧接触追跡とプライバシー権の衡量、⑨地方と中央の連携、といった点に関しては日本にとどまらず世界的に問題となった ELSI 課題であることが明らかになった。

#### <その他>

- ・ パンデミック ELSI タイムラインの作成

新型コロナウイルス感染症に関する新聞記事(2020年1月～)を ELSI の観点からまとめたパンデミック ELSI タイムラインを作成・公開した。刻一刻と変化していくパンデミックの状況とその世界的な対策を整理して分析するために、パンデミックに関する ELSI を分析するために重要となるニュース記事を、いくつかのカテゴリーに従ってタグ付けし整理して、タイムラインを作成した。時系列に従って冷静な分析をするために重要なツールとなると思われる。

URL: <https://onl.sc/eUq5fL2>” <https://onl.sc/eUq5fL2>

■項目 2：過去の感染症対策における ELSI の抽出と検討

日本の感染症法の成立前後の厚生科学審議会感染症分科会などの議事録を整理し、どのような論点に関して、どのような議論がなされてきたのか、分析を続けた。対象としたものは、厚生科学審議会のほか感染症分科会（結核部会と感染症部会含む）及び感染症部会（結核部会含む）である。結核対策を軸にその他感染症対策について分析を進めているほか、感染症法と伝染病予防法の改正に関する議論の調査を継続している。また感染症法成立に影響のあったと考えられるエイズ予防法に関する議論についても調査を継続している。これらの成果の発表は現在準備中であるが、近日中に公開し一般の利用に供したい。

■項目 3：トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系の研究モデルの開発

< ELSI/RRI フォーラムの開催 >

2022年度は、ELSI/RRI フォーラムを合計4回開催した（白井哲哉氏、吉澤剛氏、見上公一氏、東島仁氏）。東島氏を除くすべてのフォーラムの記録は、読売新聞の増田弘治氏の協力を仰いだうえで、一般にわかりやすい形に編集し、既に web 上で公開している（東島氏の記録は2023年5月中に公開予定）。フォーラムでの対話を通じて、ELSI への取り組みの多様なあり方や国内における ELSI 関連の研究や実践における課題、そしてそれに対してとりうる改善策が一定程度把握された。これらは、ELSI とは何を研究対象としてきたのか、そして、ELSI 研究のこれからのあるべき姿を理解するために極めて有益である。

白井哲也氏：<https://onl.sc/NPPAEpy>” <https://onl.sc/NPPAEpy>

吉澤剛氏：<https://onl.sc/4uJ83gM>” <https://onl.sc/4uJ83gM>

見上公一氏：<https://onl.sc/MekVZKF>” <https://onl.sc/MekVZKF>

< 一般に向けての提言の発表 >

本研究班のメンバーが専門家として参加する形で、COVID-19 対策のあり方に関する政策提言を行った。この提言では、SARS-CoV-2 オミクロン株のように、重症化率が低く伝播性の高いウイルスの流行という感染状況の変化を踏まえ、ELSI の観点から、社会的に取られるべき措置を示し、厚生労働省の新型コロナウイルス感染症対策アドバイザーボードにも提出された。提言の作成にあたっては、本プロジェクトでの調査の成果を活用した。

こうした取り組みは、エビデンスと冷静な議論に基づいた社会的意思決定に資するだけでなく、トランスサイエンス問題に貢献する人文社会科学系研究者のモデルの一つとして、本研究にとっても重要な意義を持つ。

提言：武藤香織、磯部 哲、井上悠輔、大北全俊、児玉 聡、田代志門、田中幹人、奈良由美子、横野 恵、「今後の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策における倫理的法的社会的課題（ELSI）の観点からの提言」（<https://www.mhlw.go.jp/content/1090000/001036023.pdf>” <https://www.mhlw.go.jp/content/1090000/001036023.pdf>）

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

2022年度は、前年度から継続して様々な資料の紹介、および多くの外部の研究者とのセ

ッションを重ねた。項目 1 から項目 3 に関して、進捗はどれもおおむね順調である。その結果、パンデミックの ELSI として考慮すべき大まかな論点の析出は行うことができ、その成果は、児玉聡著、『Covid-19 の倫理学：パンデミック以後の公衆衛生』（ナカニシヤ出版、2022 年 7 月）や、Satoshi Kodama, “Ethical Challenges of the COVID-19 Pandemic: A Japanese Perspective,” *Journal of Medical Internet Research*, Vol 25, 2023 などにおいて、まとめて公表することができた。2023 年度はこれらの成果を踏まえて、パンデミック対応における日本の独自性の分析さらには日本固有の価値の析出、ポストパンデミックへの移行に伴う問題の検討といった課題に取り組みたい。さらに、後述する通り、現在、紹介した資料に関して DOI をつけ京都大学の学術情報リポジトリへ登録する作業を進めている。2023 年度は、こうした取り組みも前進させ、堅固な基盤をもったアーカイブズの構築に取り組んでいきたい。

### 2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2022 年 4 月 22 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	4 月度の研究の進捗と意見交換。 「各自治体のコロナ条例における 差別禁止の取り組み」等に関する 議論。
2022 年 5 月 23 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	5 月度の研究の進捗と意見交換。 Crisis Standard of Care 等に関する 議論。
2022 年 6 月 22 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	6 月度の研究の進捗と意見交換。
2022 年 7 月 28 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	7 月度の研究の進捗と意見交換。 Oxford Covid-19 Government Response Tracker 等についての 議論。
2022 年 9 月 14 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	8-9 月度の研究の進捗と意見交 換。
2022 年 10 月 26 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	10 月度の研究の進捗と意見交 換。生命倫理学会での発表に関す る議論。
2022 年 11 月 28 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	11 月度の研究の進捗と意見交 換。
2023 年 1 月 27 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	12-1 月度の研究の進捗と意見交 換。「今後の新型コロナウイルス 感染症(COVID-19)対策における 倫理的法的社会的課題（ELSI） の観点からの提言」等について議 論。
2023 年 2 月 28 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	2 月度の研究の進捗と意見交換。
2023 年 3 月 23 日	月例研究者全体 ミーティング	オンライン	3 月度の研究の進捗と意見交換。 「ポスター分析調査」等について 議論。

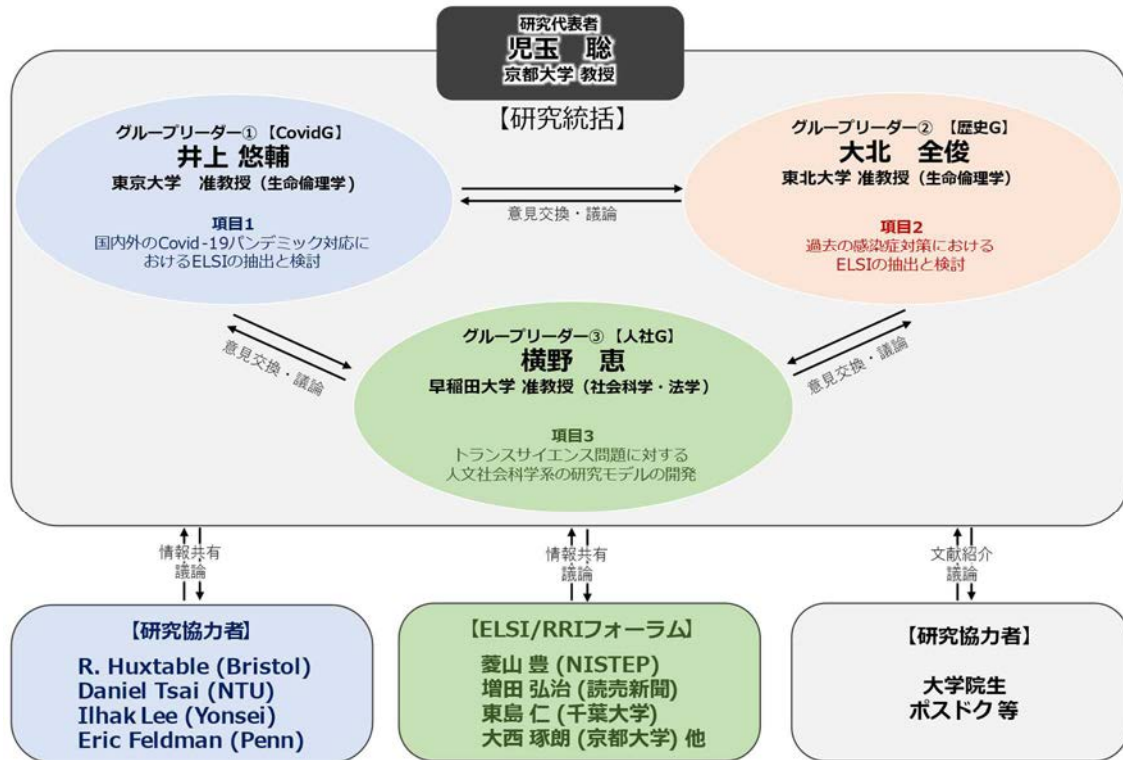


2022年8月19日	学生勉強会	オンライン	『コロナの憲法学』の検討。
2022年10月24日	学生勉強会	オンライン	『コロナの憲法学』の検討。
2022年11月15日	学生勉強会	オンライン	『コロナの憲法学』の検討。
2022年12月10日	学生勉強会	オンライン	『コロナの憲法学』の検討。
2023年1月13日	学生勉強会	オンライン	『コロナの憲法学』の検討。
2023年2月25日	学生勉強会	オンライン	“What Covid Has Taught the World about Ethics”の検討
2022年11月19日	日本生命倫理学会 公募シンポジウム「パンデミック ELSI の諸相」	関西学院大学	日、英、台、韓、仏におけるパンデミック対応の比較検討。
2022年12月5日	韓国・延世大学 Ilhak Lee 准教授らとのオンライン・シンポジウム	オンライン	日韓のパンデミック対応の比較検討。
2022年12月25日	2022年度京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム「人文・社会科学と倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)研究」	京都大学大学院文学研究科	ELSI 研究における人文学者の役割について議論。
2023年3月7日	台湾・国立台湾大学 Daniel Tsai 教授ら、“Taiwan – Japan bioethics symposium on digital tracing in pandemic”	オンライン	台湾と日本のパンデミック対応の比較検討。

### 3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本研究で紹介している資料に DOI コードを付け京都大学の学術情報リポジトリである KURENAI に登録する作業を進めている。このことによって、継続的な資料のアーカイブが可能になり、また検索の便も向上し、資料の死蔵といった問題を解決する一助となりうる。

#### 4. 研究開発実施体制



## 5. 研究開発実施者

### Covid グループ (リーダー氏名：井上悠輔)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
児玉 聡	コダマ サトシ	京都大学	大学院文学研究科	教授
井上 悠輔	イノウエ ユウスケ	東京大学	医科学研究所	准教授
Michael Campbell	キャンベル マイケル	京都大学	大学院文学研究科	助教
洪 賢秀	ホン ヒヨンス	明治学院大学	社会学部	研究員
濱島 ゆり	ハマシマ ユリ	ブリストル大学	医学部公衆衛生学科	博士課程
三上 航志	ミカミ コウジ	京都大学大学院	文学研究科	研究員
伊沢 亘洋	イザワ コウヨウ	京都大学大学院	文学研究科	D3
石原 諒太	イシハラ リョウタ	京都大学大学院	文学研究科	M3
小木曾 良哲	コギソ ヨシアキ	京都大学	文学部	B5
于 松平	ウ ショウヘイ	京都大学大学院	経済学研究科	D3
沼田 詩暖	ヌマタ シノン	京都大学	文学部	B4
杉村 文	スギムラ フミ	京都大学大学院	文学研究科	M1
内藤 淳之介	ナイトウ ジュンノスケ	京都大学	文学部	B5
澤田 あおい	サワダ アオイ	京都大学	工学部	B2
北爪 智佳子	キタズメ チカコ	京都大学	総合人間学部	B3
大社 裕典	オオコソ ユウスケ	京都大学	工学部	B2
安藤 萌音	アンドウ モネ	京都大学	農学部	B4
中島 丈	ナカジマ ジョウ	京都大学	文学部	B3
鍾 宜錚	ジョン イジェン	早稲田大学	社会科学部	講師
田中 美穂	タナカ ミ	日本医師会 総合		主任研究員

	ホ	政策研究機構		
小門 穂	コカド ミ ノリ	神戸薬科大学	薬学部	准教授
太田 勇希	オオタ ユ ウキ	欧州研究評議会 (ERC)助成 PJ 『責任の諸根源』		研究責任者補 佐

歴史グループ（リーダー氏名：大北全俊）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大北 全俊	オオキタ タケトシ	東北大学	医学系研究所	准教授
小門 穂	コカド ミ ノリ	神戸薬科大学	薬学部	准教授
田中 美穂	タナカ ミ ホ	日本医師会 総合 政策研究機構		主任研究員

トランスサイエンス問題に対する人文社会科学系の研究開発グループ（リーダー氏名：横野恵）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
横野 恵	ヨコノ メ グム	早稲田大学	社会科学部	准教授
鍾 宜錚	ジョン イ ジェン	早稲田大学	社会科学部	講師
太田 勇希	オオタ ユ ウキ	欧州研究評議会 (ERC)	助成プロジェ クト『責任の 諸根源』	研究責任者 補佐
石川 英里	イシカワ エリ	早稲田大学	グローバルヘル ス研究所	次席研究員 (講師)
日野 愛梨	ヒノ エリ ン	早稲田大学	社会科学部	学部学生

## 6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2022年11月19日	日本生命倫理学会 公募シンポジウム「パンデミック ELSI の諸相」	日本生命倫理学会	関西学院大学 + オンライン	30人	日、英、台、韓、仏におけるパンデミック対応の比較検討。
2022年12月5日	韓国・延世大学 Ilhak Lee 氏らとのオンライン・シンポジウム	JST-RISTEX「パンデミックの ELSI アーカイブ化」	オンライン	20人	日韓のパンデミック対応の比較検討。
2022年12月25日	2022年度京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム「人文・社会科学と倫理的・法的・社会的課題(ELSD)研究」	京都大学文学研究科	京都大学文学研究科 + オンライン	150名	ELSI 研究における人文学者の役割について議論。
2023年3月7日	台湾・国立台湾大学 Daniel Tsai 氏ら、 “Taiwan-Japan bioethics symposium on digital tracing in pandemic”	国立台湾大学、京都大学	オンライン	40人	台湾と日本のパンデミック対応の比較検討。

### 6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

#### (1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・大北全俊・田中雅之・浅井篤・井上悠輔・圓増文『「コロナ」がもたらした倫理的ジレンマ』、日本看護協会出版会、2022年10月。
- ・児玉聡『Covid-19 の倫理学：パンデミック以後の公衆衛生』、ナカニシヤ出版、2022年7月。
- ・鍾宜錚、土井健司・田坂さつき・加藤泰史編『コロナ禍とトリアージを問う：社会が命を選別するということ』第3章を執筆、青弓社、2022年5月。
- ・鍾宜錚・田中美穂、公益財団法人日本学術協力財団編『学術会議叢書 30 「人間の尊厳」とは—コロナ危機を経て—』第5章を分担執筆、日本学術協力財団、2023年1月。
- ・鍾宜錚、加藤泰史編『コロナ・トリアージ：資料と解説』第4章を執筆、知泉書館、2023年3月。

#### (2) ウェブメディアの開設・運営

- ・プロジェクト Web サイト  
サイト名：「パンデミックに取り組む応用哲学・倫理学：哲学と ELSI 研究のためのアーカイブ」（2020年5月開設）  
<URL>： <https://www.pandemic-philosophy.com/> <https://www.pandemic-philosophy.com/>
- ・プロジェクト Twitter アカウント  
アカウント名：@pandemicphilos1（2020年5月開設）  
<URL>： <https://twitter.com/pandemicphilos1>  
<https://twitter.com/pandemicphilos1>
- ・プロジェクトニュース・情報発信用 Twitter アカウント  
アカウント名：@pandemethics（2021年12月開設）  
<URL>： <https://twitter.com/pandemethics> <https://twitter.com/pandemethics>

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等  
該当なし

### 6-3. 論文発表

(1) 査読付き（2件）

●国内誌（1件）

- ・鍾宜錚「パンデミック時の意思決定——台湾における DNR 指示の使用と治療中止の課題」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』、第 40 号、2023 年 45-59 頁。  
<https://onl.sc/iKLzuRG>

●国際誌（1件）

- ・Satoshi Kodama, “Ethical Challenges of the COVID-19 Pandemic: A Japanese Perspective,” *Journal of Medical Internet Research*, Vol 25, 2023, <https://www.jmir.org/2023/1/e44820>, e44820.

(2) 査読なし（1件）

- ・大北全俊「日本の COVID-19 対策について 法規範の検討」『倫理学研究』、第 52 巻、2022 年、14-22 頁。

### 6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 6件、国際会議 3件）

- ・児玉聡「功利主義の可能性と限界（教育講演）」、第 15 回日本看護倫理学会年次大会、2022 年。
- ・児玉聡・有馬斉・竹下啓「コロナ禍と死生（鼎談）」、第 27 回日本臨床死生学年次大会、2022 年。
- ・児玉聡「近年の医療倫理——コロナ禍における諸問題」、第 50 回日本集中治療医学会大会、2023 年。
- ・横野恵「ヒトゲノム研究と ELSI」、2022 年度京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム「人文・社会科学と倫理的・法的・社会的課題（ELSI）研究」、京都大学、2022 年。
- ・Satoshi Kodama, “Ethical, legal, and social aspects of end-of-life care in Japan,” *Ethics of End-of-life care: From Discourse, Policy to Practice (Symposium)*, 2023.
- ・Yicheng Chung, “The concept of “good death” and its legal application in East-Asian context: Experiences in Taiwan,” SYMPOSIUM: Ethical, legal, social, and historical

aspects of ageing society and end-of-life care in Japan and the Netherlands, 2023.

(2) 口頭発表 (国内会議10件、国際会議7件)

- ・井上悠輔「公衆衛生倫理をめぐる視点と課題」、第81回日本公衆衛生学会総会メインシンポジウム「公衆衛生倫理について考える」、2022年。
- ・井上悠輔「指定発言(特定質問)」、第34回日本生命倫理学会年次大会公募シンポジウム「パンデミック ELSI の諸相—日本と外国の政策比較を通じた検討」、2022年。
- ・児玉聡「Covid-19 のパンデミックと二つの倫理」、第34回日本生命倫理学会年次大会公募シンポジウム「生命科学と感染症との接合及びそのガバナンスに関する検討」、2022年。
- ・児玉聡「パンデミックの倫理学」、関西公共政策研究会、2023年。
- ・鍾宜錚「台湾の COVID-19 対策による終末期医療への影響—事前指示書による治療中止の課題—」、第34回日本生命倫理学会年次大会、2022年。
- ・鷹田佳典・田中美穂・鍾宜錚「調査報告—高齢中華圏出身者の社会的孤立と支援の課題—日本におけるインタビュー調査から—」、オンライン・シンポジウム「高齢中華圏出身者の社会的孤立の現状と支援の課題」、2022年。
- ・田中美穂・伊沢亘洋「日本の COVID-19 対応政策の検討—政策の厳格さ指標を参考に—」、第34回日本生命倫理学会年次大会公募シンポジウム「パンデミック ELSI の諸相—日本と外国の政策比較を通じた検討」、2022年。
- ・三上航志・小門穂「フランスと日本におけるパンデミック対応の批判的検討」、第34回日本生命倫理学会年次大会、2022年。
- ・Miho Tanaka and Satoshi Kodama, “ACP discussions in Japan during the COVID-19 pandemic: a comparison with British and US studies,” The 16th World Congress of Bioethics, 2022.
- ・Minori Kokado, “La grossesse aux temps de la pandémie,” Séminaire de recherche franco-japonais Concilier santé et droits fondamentaux en période de pandémie - Une analyse juridique des expériences de la France et du Japon, 2022.
- ・Satoshi Kodama and Miho Tanaka, “Ethical, legal, social, and historical aspects of ageing society and end-of-life care in Japan: An Overview,” SYMPOSIUM: Ethical, legal, social, and historical aspects of ageing society and end-of-life care in Japan and the Netherlands, 2023.
- ・Yicheng Chung, Miho Tanaka and Hyunsoo Hong, “A cross-national literature review of the impact of COVID-19 on end-of-life care implementation in Japan, South Korea, and Taiwan,” 16th World Congress of Bioethics 2022, 2022.
- ・Yicheng Chung, “Impact of COVID-19 on Patient Autonomy: The use of Do-Not-Resuscitation Order and The Practice of Advance Care Planning during COVID-19 Pandemic in Taiwan,” 25th World Congress for Medical Law, 2022.
- ・Yuri Hamashima and Satoshi Kodama, “Priority setting in vaccine allocation in Japan,” Priorities 2022 - 13th International Society for Priority Setting Conference, 2022.
- ・Yuri Hamashima, Amanda Owen-Smith, Tim Jones and Joanna Coast, “Contrasting primary care doctors’ dual agency roles in England and Japan: an in-depth interview study,” European Health Economics Association (EuHEA) Conference 2022, 2022.

(3) ポスター発表 (国内会議0件、国際会議1件)

- ・Yuri Hamashima, Amanda Owen-Smith, Tim Jones, Joanna Coast, “Primary care physicians as both gatekeeper and patients’ ambassador: an interview study in England and Japan,” Priorities 2022 - 13th International Society for Priority Setting Conference, 2022.

## 6－5. 新聞／TV 報道・投稿、受賞等

### (1) 新聞報道・投稿 (4件)

- ・児玉聡、「次の倫理、議論深めて」、『日経新聞』2022年5月27日高校生向け特別版
- ・児玉聡、「ワクチン接種、トリアージ、行動制限・・・ルール・プロセスに透明性を」、『京都新聞』2022年8月12日朝刊
- ・児玉聡、「コロナ対策 ELSI で考察」、『読売新聞』2023年1月26日夕刊
- ・児玉聡、「(耕論) マスク続ける？外す？ 中谷内一也さん、山口有紗さん、児玉聡さん」、『朝日新聞』、2023年3月21日朝刊

### (2) 受賞 (0件)

該当なし

### (3) その他 (1件)

- ・武藤香織、磯部 哲、井上悠輔、大北全俊、児玉聡、田代志門、田中幹人、奈良由美子、横野 恵、「今後の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策における倫理的法的社会的課題（ELSI）の観点からの提言」

(<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001036023.pdf>)

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001036023.pdf>)

## 6－6. 知財出願（出願件数のみ公開）

### (1) 国内出願 ( 0 件)

該当なし

### (2) 海外出願 ( 0 件)

該当なし